

強かん神話支持と性別ごとの社会的文脈

—— 性的に不快な経験後のプロセスに着目して ——

横 山 麻 衣*

1 はじめに

近年、性暴力を告発する運動は国際的な盛り上がりを見せている。しかし、国内では、被害経験について声を挙げた者へのバッシングが顕著で、他の先進諸国とは異なる様相を呈しているとも言われる。そもそも性暴力は、強盗、窃盗、暴行・脅迫といった他の犯罪と比べても、被害率は概して高い¹⁾。しかし、一般的には、そのような被害率の高さは認識されておらず、ごく一部の者のみが遭遇する不運な出来事というイメージが未だに根強い。なぜなら、被害に遭う者が申告をすることが非常に稀であるからだ。統計に表れない数字を暗数というが、性暴力被害は他の犯罪被害と比しても、極めて暗数が多い²⁾。つまり、被害率が高いにもかかわらず、暗数が多いのが性暴力であり、他の犯罪被害と異なり、その多くが潜在しているのが現状である。

こうした暗数の背景には、個人的要因、社会的要因、それらの相互作用があらう。個人的要因としては、恥辱感・自責感といった被害者心理や、被害を想起させるあらゆる事物を回避するといったトラウマ反応などがあり、被害の申告をためらわせる。他方、社会的要因としては、被害者の方にこそ落ち度があるといった、「強かん神話」と言われる偏見があり、被害者に沈黙を強いる。さまざまな暴力の被害者が適切なサポートを受けられないことを二次被害と

1) 法務総合研究所 2020

2) 法務総合研究所 2000, 2005, 2009, 2013, 2020。全ての調査年において、性的事件の申告率は最も低い。ただし、性的事件は第2回目までは女性のみ、第3回目以降は男女を対象にしているためか、被害率の低下が見られ、第4回目以降は窃盗の被害率が最多となっている。

* YOKOYAMA, Mai 静岡大学男女共同参画推進室 助教 m.yokoyama@shizuoka.ac.jp

言うが³⁾、性暴力被害者がしばしば直面する二次被害も、この強かん神話が要因であると指摘されてきた。社会に生きている限り、個人が社会的に共有されている考え方から影響を受けることは避けられない。それゆえ、ある社会における強かん神話の浸透と、性暴力被害に遭った個人の状況は、独立して存在しているのではなく、互いに影響を及ぼし合う。

日本社会の特徴として付言しておく、2000年前後からなされてきた議員や教育委員会による性教育への介入によって現場が委縮し⁴⁾、性交について教えられないといった、いわゆる「はどめ規定」なども存在する⁵⁾。国際セクシュアリティ教育ガイダンスでは、性教育を性機能や性感染症に限定するのではなく、健康な対人関係、反差別、人権など、幅広く包括的な教育が提供されることが望ましいとされているが⁶⁾、日本では、そうしたグローバルスタンダードとはかけ離れた性教育が主流になってしまっている⁷⁾。それゆえ、自らの身体に対する権利意識や意思表示方法などをはじめとし、何が性暴力にあたるかについても十分に教えられないまま、真偽の不確かな情報や、他者との性的なかわりに、無防備に直面せざるを得ないような現状がある。国際的な動向に鑑みれば、日本の強かん神話への人々の支持状況やその要因について明らかにすることは、今日において重要な課題である。

2 先行研究

強かん神話とは、「男性から女性への性的な攻撃を否認・軽視・正当化する、性暴力（の範囲・原因・文脈・結果など）についての記述的／規範的な考え」⁸⁾のことをさす。例えば、「はじめてのデートで男性の家や部屋へ行く女性は、セックスをしてもかまわないと暗に示している」⁹⁾、「レイプされた女性に被害

3) Symonds [1980] 2010

4) Unesco 2018=2020; 橋本ほか 2018

5) 橋本ほか 2018: 159

6) Unesco 2018=2020

7) 橋本ほか 2018

8) Gerger et al. 2007

9) Burt 1980

の落ち度があり、無実ではない」¹⁰⁾、「男性は通常女性に対してセックスを強いる気はないが、時折、性的に興奮しすぎてしまうことがある」¹¹⁾といった考えである。1970年代のフェミニズムでは、こうした強かん神話が広く支持される背景には、性別役割に対する固定観念があると指摘されてきた¹²⁾。こうしたフェミニズムにおける主張を検証するため、どのような属性・態度・経験を持つ者によって、また、どれほど多くの者によって、強かん神話が支持されているかについて、1970年代後半から実証研究が実施されてきた。ランダムサンプリングに基づく聞き取り調査を実施した代表的な研究では、強かん神話の支持は、対人間暴力の許容、固定的な性別役割意識、異性への敵対心と関連がみられることが明らかにされた¹³⁾。そして、その後の一連の研究において最も一貫して確認されたのは、性別という属性で、女性よりも男性の方が強かん神話を支持する傾向にある。その他、比較的一貫して強かん神話支持との関連が見出されたのは、性暴力加害傾向、固定的な性別役割意識、異性への敵対心であった¹⁴⁾。支持する者の割合は、国によって差が大きく、先進国では相対的に低い、その他の国では6割を超える結果なども報告されている¹⁵⁾。

こうした、国の民主化や文明化の程度と、そこに居住する人々の考え方が関連している点については、興味深い調査結果がある。15カ国の大学生を対象にした、強かん神話への支持スコアの比較研究では、各国の大学生の強かん神話への支持度と、当該国の女性の労働力率・識字率・高等教育入学率との相関が確認されている¹⁶⁾。つまり、人々が強かん神話を支持するあり方は、世界経済フォーラムによるジェンダーギャップランキングで評価されているような、社会におけるジェンダー平等度と関連があることを示唆している。この比較研究では、日本を対象として含まれていないが、日本のジェンダーギャップランキングが153か国中121位（2020年）であり、2006年から概ねランクが下降

10) Feild 1978

11) Payne et al. 1999

12) 例えば、Brownmiller 1975=2000

13) Burt 1980

14) Lonsway & Fitzgerald 1994

15) Nayak 1999; Nayak et al. 2003

16) Ward 1995: 54-5

していることを踏まえると、強かん神話への支持度も国際的に見ればあまり低いことが推測しうる。

強かん神話（rape myth）という言葉が用いられ始めたのは1970年代であるが¹⁷⁾、これら研究で共通して指摘されていたのは、被害に遭った者がかかわらざるを得ない専門家による強かん神話支持であった。この点については、弁護士、医師、カウンセラー、警察官の約半数は「ほとんどのレイプ被害者は加害者と顔見知りである」という事実を知らないと回答し、「女性ではなく男性にレイプの責任がある」という考えを支持した割合が半数以下である¹⁸⁾、アメリカのカウンセラーの強かん神話の支持は全体的に高く、男性では性暴力被害者のカウンセリング経験がある場合には、ない場合よりも強かん神話を有意に支持しない傾向がある¹⁹⁾ ことなどが明らかにされてきた。また、対人援助の専門家予備軍を対象にした調査結果からは、社会福祉学科の大学院生・学部生で、強かん神話をより支持する者はアルコール依存症者への偏見も強い傾向が見られ、強かん神話は学部生よりも院生の方が支持し、また、白人でない者よりも白人の方が支持する傾向がある²⁰⁾、イギリスの医学部の学生の強かん神話の支持は全体的に低い、女性よりも男性の方が強かん神話を支持する傾向がある²¹⁾ ことが明らかにされている。

ただし、近年の強かん神話研究のレビュー論文では、上記のような先行研究を軽視した整理がなされている。具体的には、人々が強かん神話を支持するのは、個人の心理的機能が要因だとする説であり、公正な世界信念や、防衛帰属といった心理学理論などが、強かん神話支持を説明する理論だという位置づけである²²⁾。公正な世界信念とは、人は概して、世界は公正で予測可能だと信じており、それゆえ不当な苦しみの被害者に直面した際には、公正な世界への自らの信念を守るために被害者の落ち度を探して非難する、という理論である。防衛帰属とは、自らの不安を除去するために、不利益を被った他者にその要因

17) 例えば、Schwendinger & Schwendinger 1974; Brownmiller 1975

18) Ward 1995: 58-61

19) Kassing & Prieto 2003

20) Baldwin-White & Elias-Lambert 2016

21) Williams et al. 1999

22) 例えば、Grubb 2012; Van der Bruggen & Grubb 2014; Parratt 2017; Russel 2017

を帰属させるという理論である。しかし、これら心理学理論は、最も一貫して確認されてきた性別の効果について説明するものではない。また、これらレビュー論文においては、固定的な性別役割観や異性への敵対心、社会のジェンダー平等度との関連といった先行研究の知見も、しばしば排除されている。

人々が持つ信念や考え方に取り組んできた領域は、知識社会学と呼ばれる。その定義については議論があるが、「知識社会学は人間のものの考え方とそれが展開される社会的文脈との間の関係を問題にするという点に関しては、ほぼ一般的な同意がみられている。それゆえ知識社会学ははるかにもっと一般的な問題、つまり考え方そのものの存在拘束性という問題の社会学的中点をなすもの、といてよいであろう」²³⁾。それゆえ、強かん神話というものの考え方が性別によって拘束されうるのであれば、性別ごとに展開される社会的文脈が、強かん神話への支持のあり方といかに関係しているかは、社会学的に重要な問いである。1950年代にジェンダーという用語が使用され始め、その後盛んに展開されてきた能力と性差についての研究では、男女間では差よりも類似性が大きく、時に同性間の個人差の方が大きいという知見が積み重ねられてきた。しかしながら、心理学領域では、こうした性差の有無を解釈する理論が乏しいゆえに、そのメカニズムが解明されない傾向があるとも指摘されている²⁴⁾。実際、上述のレビュー論文では、性別による効果は単なる回答者の属性として言及されるのみで、検証や議論に値する知見だとはみなされていないようである。しかしながら、公正な世界信念や帰属理論といった心理学理論に基づかない他の研究においても、性別の効果それ自体は主題化されてこなかった。

3 問題設定

以上のような問題関心に基づき、本稿は、強かん神話研究で最も一貫して確認されてきた性別の効果を主題化し、なぜ性別によって強かん神話への支持が異なるのかを検証することを目的とする。

強かん神話を構成する要素は多岐に渡るが、男性に関する記述よりも女性に

23) Berger & Luckmann 1966=2003: 6

24) 鈴木・柏木 2006: 26-7

関する記述が多い。例えば、大淵ほか（1985）では、代表的な強かん神話尺度である RMA²⁵⁾ の要素を 7 つに整理している。性的欲求不満（男性の抑えがたい性的欲望による）、衝動行為（一時的な激情によるので厳しくとがめるべきでない）、女性の性的挑発（女性の性的魅力がレイプを誘因する）、暴力的性の容認（暴力的に扱われることで女性は性的満足を得る）、女性の被強姦願望（女性は無意識に強姦されることを願望している）、女性のスキ（女性が自らレイプされる危険を作り出している）、ねつ造（女性が男性に恨みを晴らすためにねつ造したものが多い）であり、これらのうち 5 つは女性の行為や意識についての記述である。強かん神話は、基本的にはレイプについての記述であるが、定義にあるとおり、様々な性暴力について適用される考え方である（痴漢は女性の服装が誘発する、セクハラは告発は仕返しである、など）。性暴力被害についての先行研究では、男性よりも女性の方が被害率は高いが、男性の被害も一定数確認されてきた²⁶⁾。それゆえ、性別にかかわらず、強かん神話を自らの経験と照合して検討する機会がある者の割合も一定数存在すると言える。これらのことを踏まえると、女性が男性よりも強かん神話支持傾向が低いのは、何らかの性暴力被害に遭う割合が高く、主に女性についての記述である強かん神話について検討する機会が高いからではないかと考えられる。他方、男性では、性暴力被害に遭うことは、加害者もまた男性であることが多いゆえに、女性ではなく男性の行為や意識を検討する機会になる可能性が高い。さらに、女性よりも被害に遭う割合が相対的に低いいため、女性に比べれば支持傾向が強くなるのではないかと考えられる。

ただし、性暴力被害経験のみが、強かん神話を支持しない傾向をもたらすのではないだろう。実際、既述のランダムサンプリングに基づく調査では、レイプやレイプ未遂被害経験の有無を問うているが、それらと強かん神話支持傾向との関連は確認されていない²⁷⁾。つまり、被害経験それ自体のみでは、強かん神話という、性暴力や性別に対する偏見を見直す契機にはならない可能性がある。性暴力被害後の「回復」のプロセスにおいては、被害経験や自己の再構成

25) Burt 1980

26) 中嶋・宮城 1999; 宮地 2006; 内閣府男女共同参画局 2017; 日本性教育協会編 2019

27) Burt 1980

がなされるという²⁸⁾。それは、強かん神話で描かれるような被害者像の書き換えであり、性別に課される規範に対する抵抗である²⁹⁾。自己は他者との相互行為の中で形成され続けるプロセスであるが、他者は自己にとってコントロールできるものではない。同様に、強かん神話が社会的に共有されていることも、被害に遭った者にとってはコントロールの対象外である。そうした現実が、性暴力被害に遭った者にいかなる影響を与えるかを明らかにしてきたのが、ソーシャルサポート研究である。先行研究では、他者からのネガティブな反応を受けた場合には PTSD の重症度やセルフエスティームの低下との有意な相関が確認された³⁰⁾。この知見は、「回復」のプロセスにとって他者のネガティブな反応がいかに有害であることを示唆している。それゆえ、何らかの性暴力被害に遭ったことがある者のうち、周囲の者との関係の変化を経験している者は、強かん神話の書き換えも共起している可能性がある。被害に遭った者が統制しようとすれば、自己を取り巻く環境であり、それを通じて自己の再構成を試みるものが可能となる場合もあろう。自己の再構成と他者の存在は不可分である。このような考えに基づき、本稿における仮説は、性的に不快な経験がある者のうち、その後に周囲の者とのかかわりの回避を経験している者において、強かん神話への支持度がより低くなる、である。ただし、強かん神話は主に女性についての記述が多いため、男性の場合は、女性と同程度の影響は受けないと考えられる。すなわち、男性の場合は、性的に不快な経験、その後の周囲の者とのかかわりの回避を経験している者において、強かん神話への支持度がより低くなるが、女性と同程度には支持度は低下しないのではないかと考えられる。

4 方法

4.1 調査概要

2016 年と 2017 年に、関東圏の国立大学のある科目を受講した学部生を対象

28) Herman 1992=1995: 308-11

29) Herman 1992=1995: 311

30) Ullman 2000

に、「性暴力と社会的要因についての調査」と題した調査票調査を実施した³¹⁾。調査は、当該大学の研究倫理審査を受け、承認された。当該科目のシラバスには、女性・性暴力・被害者支援といったキーワードが記載されていたため、そうした主題にある程度関心のある学生が履修したと思われる。調査票調査は、初回講義日に実施した。調査票を配布する前に、隣の席を必ず空け、他者の回答を見たり、他者と相談したり、私語をすることのないよう指示した上で、説明書を配布し、口頭でも説明書の主要部分の読み上げを行った。その後調査票を配布し、全員の記入が終わった段階で、性的に不快な経験についての回答が見えないよう調査票を折りたたむよう指示し、回収した。

4.2 質問項目

4.2.1 回答者の属性

性別（男性、女性、その他）と年齢について問うた。

4.2.2 強かん神話

本研究では、AMMSA（Acceptance of Modern Myths about Sexual Aggression）³²⁾を和訳したものを用いた（表3）。従来、最もよく用いられてきた強かん神話尺度はRMA（Rape Myth Acceptance Scale）³³⁾である。その後、RMAでは回答結果が正規分布を示さなくなってきたことから、新たに開発されたものがIRMA（Illinois Rape Myth Acceptance Scale）³⁴⁾である。さらに、IRMAもまた、正規分布を示しにくくなる。女性に対する性差別的な意識の表明はポリティカル・コレクトネスの観点から回避されるようになってきたからである³⁵⁾。そうした人々の現代的意識を反映した尺度として開発されたものがAMMSAであ

31) 多くの先行研究において大学生が対象とされてきたが、その一般化可能性は検討すべき課題とされてきた。それゆえ、2時点において調査を行い、その傾向を捉えうる時系列データを取得することで、回答傾向の一貫性を査定できると考えた。強かん神話平均点の実施年による平均の差の検定を行ったところ、有意な差は見られなかった。

32) Gerger et al. 2007

33) Burt 1980

34) Payne et al. 1999

35) Gerger et al. 2007

る。この AMMSA も IRMA と同様に、正規分布を示すよう設計されたものである。

質問文は「性に関する以下のような考え方に対して、どう思いますか？一般的な考えとしてではなく、あなた自身の考えに最も近い番号に、それぞれ○をつけてください」とした。選択肢は4件法（「そうでない」の1から「そうである」の4）に、「わからない」を加えた。強かん神話尺度は海外で開発されたものであるので、日本の社会的・文化的状況に必ずしもそぐわない質問項目が含まれるからである。例えば、最もよく用いられてきた RMA の「女性がブラをつけずに、あるいは短いスカートやタイトなトップスを着て外出するときは、まさにトラブルを求めているときである」という質問項目や、IRMA の「レイプは、一部のフェミニストが人々に訴えるほど大した問題ではない」といった質問項目などである。AMMSA も同様に、回答しづらいと思われる質問項目があるが、正規分布を示しやすいという分析上の利点から AMMSA を採用した。

4.2.3 性暴力被害経験

代表的な強かん神話研究のように、レイプやレイプ未遂のみを問うのではなく、性的に不快な経験を幅広く問うため、88項目を用いたセクシュアルハラスメント調査³⁶⁾の選択肢を参照し作成した。質問文は「あなたが望んでいないのに、以下のようなことをされたことはありますか？あてはまる番号すべてに○をつけてください（○はいくつでも）」とした。選択肢は、「しつこくデートや食事に誘われた」、「着替えや裸を見せられた」、「性的な冗談や性的経験を聞かされた」、「『童貞』『処女』など、性経験のないことをからかわれた」、「裸や下着姿の写真を送るよう言われた」、「着替えやトイレを覗かれた」、「いやらしい目で体を見られた」、「痴漢ではないかと不安になった」、「『チビ』『ブス』『デブ』など顔や体についてからかわれた」、「裸・衣服の中や下着姿・着替えなどを撮影された」、「キスをされた」、「セックスさせられそうになった」、「性器を触らせられた」、「セックスさせられた」、「からだを押し付けられた」、「お尻や胸などを触られた」、「抱きつかれた」、「性器を触られた」の18項目に、

36) 働くことと性差別を考える三多摩の会編（1991）が作成した質問項目を参照した。

「どれも無い」「答えない」を加えた。

4.2.4 周囲の者とのかかわりの回避

周囲の者とのかかわりの回避に関しては、性暴力被害者の QOL 研究³⁷⁾で用いられたツールキット³⁸⁾を参照して作成した。質問文は、「その被害の後、普段と比べて、以下の人たちとのかかわりを避けるようなことはありましたか、それぞれ当てはまる番号に○をつけてください（○はそれぞれひとつずつ）」とした。選択肢は5件法（「いつもあった」の5から「ぜんぜんなかった」の1）とし、友人や知人、家族や親せきという2つのカテゴリーについて回答を得た。

5 結果

回収数は369であり、うち、有効回答数は363であった。以下、各分析により有効回答数が異なるため、合計が363とならない場合もある。

強かん神話平均点³⁹⁾の平均値は、全体（ $n=354$ ）で2.35（分散.188, 標準偏差.434）、女性（ $n=210$ ）では2.29（分散.188, 標準偏差.434）、男性（ $n=144$ ）では2.43（分散.177, 標準偏差.420）であった。図1は強かん神話平均点のヒストグラムである。AMMSAは回答結果が正規分布となるよう設計されているが、和訳したAMMSAでも正規性が確認された（ $p>.05$ ）。t検定を行ったところ、男女間での平均差が確認され（ $p<.05$ ）、先行研究と同様、女性よりも男性の方が、統計的に有意に強かん神話を支持する傾向が見られた。

性的に不快な経験の行為種別の合計数の平均値は、全体（ $n=324$ ）で1.38（分散3.902, 標準偏差1.975）、女性（ $n=190$ ）で1.73（分散4.483, 標準偏差2.117）、男性（ $n=130$ ）で.79（分散2.321, 標準偏差1.523）であった。何らかの性的に不快な経験が1度でもある者は、女性で110名、男性で39名であった。性器への接触を伴うような性的に不快な経験がある者は、女性で17名、

37) Suris et al. 2007

38) Lehman et al. 1995

39) すべて「わからない」と回答したケースは除外し算出した。

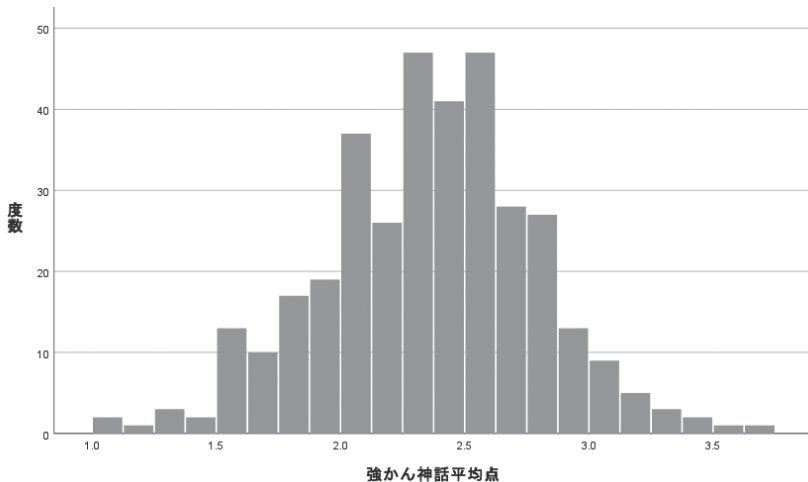


図1 強かん神話平均点のヒストグラム

男性で6名だった⁴⁰⁾。

その性的に不快な経験後の周囲の者とのかかわりの回避については、表1のとおりである。家族や親せきとのかかわりよりも、友人や知人とのかかわりにおいて、回避する頻度が多く見られた。

以下では、性的に不快な経験がある者のうち、その後に周囲の者とのかかわりの回避の頻度が高い者は、強かん神話への支持度がより低くなるか否かについて検討する。強かん神話平均点を従属変数とし、性別、性的に不快な経験、周囲の者とのかかわりの回避を要因とした多元配置の分散分析を行った。性的に不快な経験は、全体の平均値を閾値として二値化した変数を用い、周囲の者とのかかわりの回避は、分布の偏りがより小さい、友人や知人とのかかわりの回避の変数を用いた。友人や知人とのかかわりは、上記の通り分布の偏りがあるため、「ぜんぜんなかった」と「ほとんどなかった」、「ときどきあった」、「よくあった」と「いつもあった」の3つのカテゴリーに区分した。表2は、多元配置分散分析の検定表である。

40) 「セックスさせられそうになった」、「性器を触らせられた」、「セックスさせられた」、「性器を触られた」のいずれかの被害経験がある者。

表 1 周囲の者とのかかわりの回避

	いつも あった	よく あった	ときどき あった	ほとんど なかった	ぜんぜん なかった
友人や知人との かかわりを避ける (n=140)	4	4	24	25	83
家族や親せきとの かかわりを避ける (n=139)	2	2	9	15	111

表 2 強かん神話支持に対する分散分析の結果

独立変数		df	F	独立変数		df	F
性別	a	1	9.023**	性別	a	1	4.319*
性的に不快な経験	b	1	0.74	性的に不快な経験	b	1	1.92
a×b		1	1.511	友人や知人とのかわり	c	2	5.108**
調整済 R ²			.028*	a×b		1	1.189
n		319		a×c		2	5.351**
				b×c		2	4.801*
				a×b×c		1	.102
				調整済 R ²			.111**
				n		137	

**1%, *5%

表 2 の 4 列目にあるように、強かん神話への支持に対し、性別と性的に不快な経験という 2 つの要因のみで分析した結果、性別の主効果は確認されたものの、性的に不快な経験の主効果、性別と性的に不快な経験の交互作用効果は有意でなかった。

表 2 の 8 列目は、強かん神話への支持に対する、性別、性的に不快な経験、友人や知人とのかかわりの回避の主効果、それらの交互作用効果の検定結果について示したものである。性別と友人や知人とのかかわりの回避の 2 要因において、それぞれ有意な主効果が見られた。また、性別と友人や知人とのかかわりの回避の 2 要因と、性的に不快な経験と友人や知人とのかかわりの回避の 2 要因における、有意な交互作用効果が確認された。

表 2 の 8 列目で確認した、性別と友人や知人とのかかわりの交互作用効果について詳細に確認しよう。図 2 は、性別と友人や知人とのかかわりの回避の頻

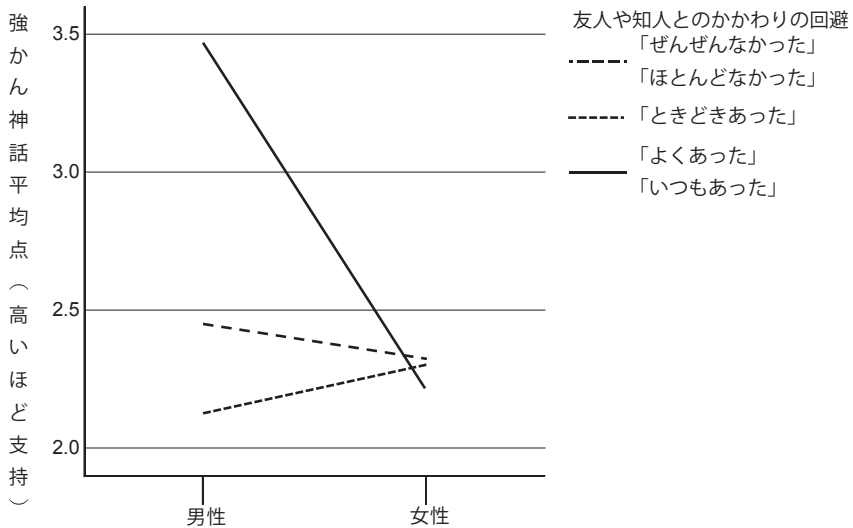


図2 性別・友人や知人とのかかわり別の強かん神話平均点

度別に見た強かん神話平均点である。この図からわかるように、女性では、友人や知人とのかかわりの回避の頻度によって、強かん神話平均点の平均値はあまり差がなかった。他方、男性では、友人や知人とのかかわりの回避の頻度が最も高い群で、強かん神話平均点の平均値が最も高くなっていた。また、女性の場合、性的に不快な経験後の、友人や知人とのかかわりの回避の頻度が高いほど、強かん神話の平均点が低くなっており、かかわりの回避の頻度が低いほど、強かん神話の平均点が高くなっていた。他方、男性では、性的に不快な経験後の友人や知人とのかかわりの回避の頻度が高いほど、強かん神話の平均点が高くなっていた。ただし、強かん神話の平均点が最も低かったのは、かかわりの回避の頻度が「ときどきあった」群で、かかわりの回避が「ほとんど・ぜんぜんなかった」群がそれをやや上回る結果となった。多重比較を行ったところ、友人や知人とのかかわりの回避の頻度についての3カテゴリ間で有意差は確認されなかった。

本稿の仮説は、女性では、性的に不快な経験がある者のうち、その後に周囲の者とのかかわりの回避を経験している者において、強かん神話への支持度が

より低くなる、であった。確かに、友人や知人とのかかわりの回避の頻度が高い群において、強かん神話を支持しない傾向が確認できた。しかし、友人や知人とのかかわりの頻度が異なるグループ間での有意差は確認されなかった。

男性については、性的に不快な経験、その後の周囲の者とのかかわりの回避を経験している者において、強かん神話への支持度がより低くなるが、女性と同程度には支持度は低下しない、であった。分析の結果、仮説とは異なり、性的に不快な経験後の友人や知人とのかかわりの回避の頻度が高い群において、強かん神話を支持する傾向が確認された。男性の場合、女性とは異なり、性的に不快な経験や周囲の者との関係の変化は、むしろ強かん神話支持度を高める結果となった。

6 結論・課題

本稿では、これまで強かん神話研究で最も一貫して確認されてきた、性別の効果について検証するため、性的に不快な経験と、その経験を再構成するにあたって起こりうる、周囲の者とのかかわりの回避の効果について分析した。強かん神話の支持傾向に対する、性別と性的に不快な経験という2つの要因の効果としては、性別の主効果のみが確認された。すなわち、女性よりも男性の方が強かん神話を支持するという、先行研究と同様の結果が見られた。強かん神話の支持傾向に対する、性別、性的に不快な経験、周囲の者とのかかわりという3要因の効果としては、性別と周囲の者とのかかわりの回避という2つの要因の主効果、および、それらの交互作用効果と、性的に不快な経験と周囲の者とのかかわりの回避の交互作用効果が有意であった。すなわち、性的に不快な経験がある者のうち、友人や知人とのかかわりの回避の頻度が上がるにつれて、概して、女性の場合は強かん神話をより支持しない傾向、男性の場合は強かん神話をより支持する傾向が確認され、女性についてののみ仮説が支持される結果となった。男性の、何らかの性的に不快な経験後の、友人や知人とのかかわりの回避の頻度の高さは、個人的要因としてはトラウマ反応等が生じている可能性が考えられ、社会的要因としては開示の結果への二次被害やネガティブな反応がなされた可能性が考えられる。一般に、男性が性暴力被害に遭うとい

う経験は、男性性からの逸脱と見做されやすいという、弱音を吐くべきでないという規範も存在する⁴¹⁾。それゆえ、被害に遭ったことを受け入れることや開示することは、女性よりもさらに難しくなることが考えられる。例えば、ランダムサンプリングに基づく、PTSDを発症しう経験についての研究では、レイプ被害率は男性よりも女性の方が高いが、レイプ被害に遭った男女では、女性よりも男性の方がPTSD発症率が高いといった調査結果がある⁴²⁾。また、性暴力と規範についての研究では、「相手が誰であろうと望まないキスや接触は断ってよい」という考えに対し、自分は賛同するが、友人たちは同程度に賛同しないと判断される傾向があり、特に女性よりも男性で、友人たちは暴力に寛容だと判断される傾向があるという⁴³⁾。こうした知見を踏まえると、何らかの性暴力被害に遭った場合、女性よりも男性の方が、周囲の者との関係の中で緊張が高まりやすいことが推測しうる。また、冒頭でも述べたように、性に関する情報は誰もがアクセスしうる状況ではなく、女性のみならず男性も性的な攻撃の対象になるといった話は、大学生でも知っている者は多くない。それゆえ、強かん神話のような考え方への支持は、男性性を確認する試みとして有用であるのかもしれない。ただし、周囲の者とのかかわりの回避と強かん神話の支持度の因果関係は本研究で特定しえない。それゆえ、そもそも強かん神話への支持度が高いゆえに、かかわりの回避が顕著となったとも考えられ、また、本研究デザインに含まれていない他の要因がこれら2要因に影響を与えている可能性もある。

このように、結果からは、性別によって強かん神話の支持傾向に差が見られるのは、性的に不快な経験後のプロセスで、被害の意味づけや自己の再構成においてポジティブな効果を持ちうる認識が異なる可能性があることが示唆された。女性の場合は、強かん神話への懐疑・抵抗が、被害の意味づけや自己の再構成にとってポジティブな効果を持ちうる。他方、男性の場合は、強かん神話の支持／強化が、自らの男性性の確認にとってポジティブな効果を持ちうると思われる。被害率は女性の方が高いものの、女性では強かん神話の支持度

41) 伊藤ほか2019: 5-6

42) Kessler et al. 1996. ただし、統計的有意差はない。

43) Hertzog & Rochelle 2014

表3 AMMSA

1	夜に「暗い路地」を通るくらい不注意な女性は、レイプされたとしても、一定程度落ち度があ る。
2	独身の女性が独身の男性を自分のアパートに招くとき、セックスするのが嫌ではないと合図して いる。
3	男性の性機能は、蒸気ボイラーのようだ。圧力が高まると、蒸気を放出しなければならない。
4	武装強盗の被害者は生命の恐怖を感じるに違いないにもかかわらず、強かん被害者よりも心理的 支援はかなり少ない。
5	女性の多くが、善意からのふるまいを「性暴力」と誤解する傾向がある。
6	疑わしい性暴力被害者について心配する代わりに、社会はもっと、環境破壊のような緊急の問題 に注意を払うべきだ。
7	害のない身ぶりを「セクシュアル・ハラスメント」と解釈するのは、男女間の争いでよくある手 口である。
8	性的な接触に関しては、女性は男性にリードしてもらうことを期待する。
9	子どもの養育権を手に入れるために、女性はしばしば、元夫に性暴力の傾向があったと偽って告 発する。
10	男性が時おり性的抑圧を解放することは、生物学的に必要である。
11	今日、女性はレイプされた後、十分な支援を受けられる。
12	度を越さない限り、示唆に富んだ表現やほめかしは、ただ単に女性が魅力的だと言っているだ けである。
13	ほとんどの女性は、知性より外見を褒められることを好む。
14	セックスがもたらす陶醉が過剰なほど大きいため、性的な犯罪についての社会の敏感さも、同じ ように過剰である。
15	男性が、パートナーである女性にセックスを強く迫るとき、これを強かんとは言わない。
16	政治家が強かんについて話題にするのは主に、この話題がメディアの注意を引きやすいからであ る。
17	仕事でのセクシュアル・ハラスメントについての議論は、主に、多くの無害な行動がハラスメン トと誤解される結果をもたらした。
18	女性はしばしば、うまくいかなかった関係に報復するためだけに、夫を夫婦間レイプで告訴す る。
19	いったん男性と女性が「いちやつき」始めたら、女性のセックスに対する不安は自動的に消えて なくなる。
20	今日、レイプの多くはメディアでの性描写によって引き起こされている部分がある。性描写は、 潜在的な加害者の性的衝動をかき立てているからである。
21	デートの場面では、女性が「ブレーキをふみ」、男性が「押し進める」ことが一般的に期待され る。
22	「夫婦間レイプ」を定義する場合、通常の夫婦間のセックスと強かんとの間に、明確な区別はな い。
23	女性の多くは、男性の暴力の問題を誇張する傾向がある。
24	女性は恥ずかしそうに振舞うのが好きである。これは、女性がセックスをしたくないことを意味 しているのではない。
25	女性が男性と関係を持ち始めたら、男性はセックスをする権利があると主張することを、女性は 知っておかなければならない。
26	夜のデートの後に、女性が自宅に男性をお茶に招いたとしたら、それは女性がセックスをしたい という意味である。
27	女性の多くは、解放されたことをただアピールするために、理由なく性的侵害について強く訴え る。
28	アルコールはしばしば、男性が女性を強かんするときの原因である。
29	今日、性暴力の被害者は、女性用の避難所、治療の提供、サポートグループなどを通じて、十分 な支援を受けている。
30	今日、本当に女性に対して性暴力を振った男性は、正当に罰せられている。

に大きな差が見られず、男性では強かん神話支持度が高くなる傾向が見られた。つまり、性的に不快な経験後の周囲の者とのかかわりの変化におけるプロセスという観点から見れば、男性では強かん神話支持度を押し上げる可能性が高いため、性別間の平均差に影響したのではないだろうか。

昨今では個人の心理的機能などの個人的要因のみに還元されるかたちで人々の強かん神話支持が説明される傾向にある。しかし、それらは性別の効果を説明する理論ではなく、性別によって社会的文脈やものの考え方が異なりうるということも前提としていない。むしろ、心理的機能も影響していると思われるが、先行研究の知見をも踏まえた上で、新たな知見を積み上げていくことが、強かん神話研究の理論的發展にとって重要だと思われる。

方法論の点では、課題も確認された。本研究では、強かん神話尺度としてはAMMSAを用いた。正規分布を示したものの、社会的・文化的状況の違いから、「わからない」という回答も散見された。先行研究のほとんどが欧米諸国で実施されてきたものであるので、それらとの比較可能性という利点も捨てがたいが、日本の社会的・文化的状況に即した強かん神話尺度の開発や、支持状況の把握も必要であるかもしれない。今後の課題としたい。

【文献】

- Baldwin-White, Adrienne and Nada Elias-Lambert, 2016, "Rape Myth Acceptance among Social Work Students," *Journal of Aggression, Maltreatment & Trauma*, 25(7): 702-20.
- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann, 1966, *The social construction of reality: a treatise in the sociology of knowledge*, New York: Doubleday. (= 山口節郎訳, 『現実の社会的構成——知識社会学論考 新版』新曜社, 2003)
- Brownmiller, Susan, 1975, *Against Our Will: men, women, and rape*, New York: Simon and Schuster. (= 幾島幸子訳, 2000, 『レイプ・踏みにじられた意思』勁草書房.)
- Burt, Martha R., 1980, "Cultural Myths and Supports for Rape," *Journal of Personality & Social Psychology*, 38: 217-30.
- Feild, Hubert S., 1978, "Attitudes Toward Rape: A Comparative Analysis of Police, Rapists, Crisis Counselors, and Citizens," *Journal of Personality & Social Psychology*, 36: 156-79.
- Gerger, H., H. Kley, G. Bohnert, and F. Siebler., 2007, "The acceptance of modern myths about sexual aggression scale: development and validation in German and English," *Aggressive Behavior*, 33(5): 422-40.
- Grubb, Amy and Emily Turner, 2012, "Attribution of blame in rape cases: A review of the impact of rape

- myth acceptance, gender role conformity and substance use on victim blaming," *Aggression and Violent Behavior*, 17: 443-52.
- 橋本紀子・池谷壽夫・田代美江子, 2018, 『教科書にみる世界の性教育』かもがわ出版.
- 働くことと性差別を考える三多摩の会編, 1991, 『女 6500 人の証言——働く女の胸のうち』学陽書房.
- Herman, J. L., 1992, *Trauma and recovery*, New York: Basic Books. (中井久夫訳, 1996, 『心的外傷と回復』みすず書房.)
- Hertzog, Jodie L., and Rochelle Lynn Rowley, 2014, "My Beliefs of My Peers' Beliefs: Exploring the Gendered Nature of Social Norms in Adolescent Romantic Relationships," *Journal of Interpersonal Violence*, 29(2): 348-68.
- 法務総合研究所, 2000, 『犯罪被害実態 (暗数) 調査』.
- 法務総合研究所, 2005, 『犯罪被害実態 (暗数) 調査』.
- 法務総合研究所, 2009, 『犯罪被害実態 (暗数) 調査』.
- 法務総合研究所, 2013, 『犯罪被害実態 (暗数) 調査』.
- 法務総合研究所, 2020, 『犯罪被害実態 (暗数) 調査』.
- 伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子, 2019, 『女性学・男性学 第3版』有斐閣.
- Kassing, Leslie R. and Loreto R. Prieto, 2003, "The Rape Myth and Blame-Based Beliefs of Counselors-in-Training toward Male Victims of Rape," *Journal of Counseling & Development*, 81: 455-61.
- Kessler Ronald C., Amanda Sonnega, Evelyn Bromet, Michael Hughes, and Christopher B. Nelson, 1996, "Posttraumatic Stress Disorder in the National Comorbidity Survey," *Archives of General Psychiatry*, 52: 1048-60.
- Lehman, A., Keran, I., & Postrado, L., 1995, *Toolkit for evaluating the quality of life for persons with severe mental illness*, Boston, MA: Health Services Research Institute.
- Lonsway, Kimberly A., and Louise F. Fitzgerald, 1994, "Rape Myths. In Review," *Psychology of Women Quarterly*, 18(2): 133-64.
- 宮地尚子, 2006, 「男児への性的虐待——気づきとケア」『小児の精神と神経』46(1): 19-29.
- 内閣府男女共同参画局, 2017, 『男女間における暴力に関する調査』.
- 中嶋一成・宮城由江, 1999, 『心への侵入——性的虐待と性暴力の告発から』本の時遊社.
- Nayak, M. B., 1999, "The Influence of Gender and Personally Knowing a Victim on Medical Students' Attitudes towards Female Victims of Interpersonal Violence," *Medical Principles and Practice*, 8: 294-300.
- Nayak, Madhabika, B., Christina A. Bryne, Mutsumi K. Martin, and Anna George Abraham, 2003, "Attitudes Toward Violence Against Women: A Cross-Nation Study," *Sex Roles*, 49: 333-42.
- 日本性教育協会編, 2019, 『「若者の性」白書——第8回 青少年の性行動全国調査報告』小学館.
- 大淵憲一・石毛博・山入端津由・井上和子, 1985, 「レイプ神話と性犯罪」『犯罪心理学研究』23(2): 1-12.

- Parratt, Kayleigh and Afroditi Pina, 2017, "From "real rape" to real justice: A systematic review of police officers' rape myth beliefs," *Aggression and Violent Behavior*, 34: 68-83.
- Payne, Diana L., Kimberly A. Lonsway and Louise F. Fitzgerald, 1999, "Rape Myth Acceptance: Exploration of Its Structure and Its Measurement Using the Illinois Rape Myth Acceptance Scale," *Journal of Research in Personality*, 33: 27-68.
- Russell, J. Kirsten and Christopher J. Hand, 2017, "Rape myth acceptance, victim blame attribution and Just World Beliefs: A rapid evidence assessment," *Aggression and Violent Behavior*, 37: 153-60.
- Schwendinger, Juria R. and Herman Schwendinger, 1974, "Rape Myths: In Legal, Theoretical, and Everyday Practice," *Crime and social justice*, 1: 18-26.
- Suris, A., L. Lind, T. M. Kashner, and P. D. Borman., 2007, "Mental health, quality of life, and health functioning in women veterans: differential outcomes associated with military and civilian sexual assault," *Journal of Interpersonal Violence*, 22(2): 179-97.
- 鈴木淳子・柏木恵子, 2006, 『ジェンダーの心理学——心と行動への新しい視座』 培風館.
- Symonds, Martin, [1980]2010, "The "Second Injury" to Victims of Violent Acts," *The American Journal of Psychoanalysis*, 70: 34-41.
- Ullman, S. E., 2000, "Psychometric Characteristics of the Social Reactions Questionnaire," *Psychology of Women Quarterly*, 24: 257-71.
- Unesco, 2018, *International Technical Guidance on Sexuality Education: an Evidence-informed Approach Revised Edition*, Unesco. (浅井春夫・良香織・田代美江子・福田和子・渡辺大輔 訳, 2020, 『国際セクシュアリティ教育ガイダンス——科学的根拠に基づいたアプローチ 改訂版』 明石書店.)
- Van Der Bruggen, Madeleine and Amy Grubb, 2014, "A review of the literature relating to rape victim blaming: An analysis of the impact of observer and victim characteristics on attribution of blame in rape cases," *Aggression and Violent Behavior*, 19: 523-31.
- Ward, Colleen A., 1995, *Attitudes toward rape : feminist and social psychological perspectives*, London: Sage Publications.
- Williams, L., G. Forster and J. Petrak, 1999, "Rape attitudes amongst British medical students," *Medical Education*, 33: 24-7.

Acceptance of Rape Myth and
Social Context by Gender:
Focus on the Process after Sexual Assault

YOKOYAMA, Mai

Gender Equality Office, Shizuoka University

m.yokoyama@shizuoka.ac.jp